

# 檜ノ木大学士の野宿

宮沢賢治

青空文庫



櫛ならノ木大学士は寶石学の専門だ。

ある晩大学士の小さな家うちへ、

「貝けいの火いてい兄弟商会」の、

赤鼻の支配人がやって来た。

「先生、ごく上等の蛋たん白ぱく石せきの注文があるのですがどうでせう、

お探しをねがへませんでせうか。もつともごくごく上等のやつを  
ほしいのです。何せ相手がグリーンランドの途方もない成金です  
から、ありふれたものぢやなかなか承知しないんです。」

大学士は葉巻を横にくはへ、

雲母紙うんもしを張った天井を、

斜めに見上げて聴いてゐた。

「たびたびご迷惑で、まことに恐れ入りますが、いかゞなものでございませう。」

そこで櫛ノ木大学士は、

にやつと笑つて葉巻をとつた。

「うん、探してやらう。蛋白石のいゝのなら、流紋玻璃りゅうもんはりを探せば

いゝ。探してやらう。僕は實際、一ペンさがしに出かけたら、き

つともう足が宝石のある所へ向くんだよ。そして宝石のある山へ

行くと、奇体に足が動かない。直覚だねえ。いや、それだから、

却かへつて困ることもあるよ。たとへば僕は一千九百十九年の七月に、

アメリカのチャイアントアーム会社の依頼を受けて、紅ルビ宝ー玉を探

しにビルマへ行つたがね、やっぱりいつか足は紅<sup>ルビー</sup>宝玉の山へ向く。それからちゃんと見附かつて、帰らうとしてもなかなか足があがらない。つまり僕と宝石には、一種の不思議な引力が働いてゐる、深く埋<sup>うづ</sup>まった紅<sup>ルビー</sup>宝玉のもの、日光の中へ出たいといふその熱心が、多分は僕の足の神経に感ずるのだらうね。その時も實際困つたよ。山から下りるのに、十一時間もかかつたよ。けれどもそれがいまのバララゲの紅<sup>ルビー</sup>玉坑<sup>かう</sup>さ。」

「ははあ、そいつはどうもとんだご災難でございました。しかしいかゞでございませう。こんども多分はそんな工<sup>ぐ</sup>合<sup>あひ</sup>に参りませうか。」

「それはもうきつとさう行くね。たゞその時に、僕が何かの都合

のために、たとへばひどく疲れてゐるとか、おほかみ狼に追はれてゐるとか、あるいはひどく神経が興奮してゐるとか、そんなやうな事情から、ふつとその引力を感じないといふやうなことはあるかもしれない。しかしとにかく行つて来よう。二週間目にはきつと帰るから。」

「それでは何分お願いいたします。これはまことに軽少ですが、当座の旅費のつもりです。」

貝の火兄弟商会の、

鼻の赤いその支配人は、

ねずみ色の状袋を、

上着のうちポケット內衣囊から出した。

「さうかね。」

大学士は別段気にもとめず、

手を延ばして状袋をさらひ、

自分の衣囊かぶしに投げこんだ。

「では何分とも、よろしくお願いいたします。」

そして「貝の火けいてい兄弟商会」の、

赤鼻の支配人は帰って行つた。

次の日諸君のうちの誰たれかは、

きつと上野の停車場で、

途方もない長い外ぐわいたう套すわいを着、

変な灰色の袋のやうな背囊はいなうをしよひ、

七キログラムもありさうな、

素敵な大きなかなづちを、

持った紳士を見ただらう。

それは櫛ならの木大学士だ。

宝石を探しに出掛けたのだ。

出掛けた為ためにたうとう櫛ノ木大学士の、

野宿といふことも起つたのだ。

三晩といふもの起つたのだ。

## 野宿第一夜



四月二十日の午后四時頃、

例の櫓ノ木大学士が

「ふん、此この川筋があやしいぞ。たしかにこの川筋があやしいぞ」とひとりぶつぶつ言ひながら、

からだを深く折り曲げて

眼め一杯にみひらいて、

足もとの砂利をねめまはしながら、

兎うさぎのやうにひよいひよいと、

葛くずまる丸川の西岸の

大きな河原をのぼって行つた。

両側はずるぶん嶮けはしい山だ。

大学士はどこまでも溯のぼつて行く。

けれどもたうとう日も落ちた。

その両側の山どもは、

一生懸命の大学士などにはお構ひなく

ずんずん黒く暮れて行く。

その上にちよつと顔を出した

遠くの雪の山脈は、

さびしい銀いろに光り、

てのひらの形の黒い雲が、

その上を行ったり来たりする。

それから川岸の細い野原に、

ちよろちよろ赤い野火が這<sup>は</sup>ひ、

鷹<sup>たか</sup>によく似た白い鳥が、

鋭く風を切つて翔<sup>か</sup>けた。

梶<sup>なら</sup>ノ木大学士はそんなことには構はない。

まだどこまでも川を溯つて行かうとする。

ところがたうとう夜になった。

今はもう河原の石ころも、

赤やら黒やらわからない。

「これはいけない。もう夜だ。寝なくちやなるまい。今夜はずるぶん久しぶりだ、愉快的露天に寝るんだな。うまいぞうまいぞ。

ところで草へ寝ようかな。かれ草でそれはたしかにいゝけれども、

寝てゐるうちに、野火にやかれちや一言いちごんもない。よしよし、この石へ寝よう。まるでね台だ。ふんふん、実に柔らかだ。いゝ寝ね台だぞ。」

その石は実際柔らかで、又敷布のやうに白かつた。

そのかはり又大学士が、

腕をのばして背はいなう囊をぬぎ、

肱ひぢうをまげて外ぐわいたう套のまゝ、

ごろりと横になつたときは、

外套のせなかに白い粉が、

まるで一杯についたのだ。

もちろん学士はそれを知らない。

又そんなこと知ったとこで、

あわてて起きあがる性質でもない。

水がその広い河原の、

向ふ岸近くをごうと流れ、

空の桔梗ききやうのうすあかりには、

山どもがのつきのつきと黒く立つ。

大学士は寝たまゝそれを眺ながめ、

又ひとりごとを言ひ出した。

「ははあ、あいつらは岩頸がんけいだな。岩頸だ、岩頸だ。相違ない。」

そこで大学士はいゝ気になって、

仰向けのまゝ手を振って、

岩頸の講義をはじめ出した。

「諸君、手つ取り早く云ふいならば、岩頸といふのは、地殻から一ちよつとくび

寸頸を出した太い岩石の棒である。その頸がすなはち一つの山である。えゝ。一つの山である。ふん。どうしてそんな変なもの  
 ができたといふなら、そいつは蓋しけだ簡単だ。えゝ、こゝに一つの  
 火山がある。熔岩ようがんを流す。その熔岩は地殻の深いところから太  
 い棒になつてのぼつて来る。火山がだんだん衰へて、その腹の中  
 まで冷えてしまふ。熔岩の棒もかたまってしまふ。それから火山  
 は永い間に空気や水のために、だんだん崩れる。たうとう削られ  
 てへらされて、しまひには上の方がすっかり無くなつて、前のか

たまつた熔岩の棒だけが、やつと残るといふあんばいだ。この棒は大抵頸だけを出して、一つの山になつてゐる。それが岩頸だ。

ははあ、面白いぞ、つまりそのこれは夢の中のもやだ、もや、もや、もや、もや。そこでそのつまり、鼠ねずみいろの岩頸だがな、その鼠いろの岩頸が、きちんと並んで、お互に顔を見合せたり、ひとりで空うそぶいたりしてゐるのは、大変おもしろい。ふふん。」

それは実際その通り、

向ふの黒い四つの峯は、

四人兄弟の岩頸で、

だんだん地面からせり上つて来た。

なら櫛ノ木大学士の喜びやうはひどいもんだ。

「ははあ、こいつらはラクシヤンの四人兄弟だな。よくわかった。

ラクシヤンの四人兄弟だ。よしよし。」

注文通り岩頸は

丁度胸までせり出して

ならんで空に高くそびえた。

一番右は

たしかラクシヤン第一子

まつ黒な髪をふり乱し

大きな眼をぎろぎろ空に向け

しきりに口をぱくぱくして

何かどなつてゐる様だが



その声は少しも聞えなかつた。

右から二番目は

たしかにラクシヤンの第二子だ。

長いあごを両手に載せて睡ねむつてゐる。

次はラクシヤン第三子

やさしい眼をせはしくまたたき

いちばん左は

ラクシヤンの第四子しし、末っ子だ。

夢のやうな黒い瞳ひとみをあげて

じつと東の高原を見た。

櫛ならノ木大学士がもつとよく

四人を見ようと起き上つたら

俄にはかにラクシヤン第一子が

雷のやうに怒鳴り出した。

「何をぐづぐづしてるんだ。潰つぶしてしまへ。灼やいてしまへ。こな  
ごなに砕いてしまへ。早くやれっ。」

櫛ノ木大学士はびっくりして

大急ぎで又横になり

いびきまでして寝たふりをし

そつと横目で見つゞけた。

ところが今のどなり声は

大学士に云つたのでもなかつたやうだ。

なぜならラクシヤン第一子は

やっぱり空へ向いたまゝ

素敵などなりを続けたのだ。

「全体何をぐづぐづしてるんだ。砕いちまへ、砕いちまへ、はね飛ばすんだ。はね飛ばすんだよ。火をどしやどしや噴くんだ。熔よ

うがん岩の用意つ。熔岩。早く。畜生。いつまでぐづぐづしてるんだ。

熔岩、用意つ。もう二百万年たってるぞ。灰を降らせろ、灰を降らせろ。なぜ早く支度をしないか。」

しづかなラクシヤン第三子が

兄をなだめて斯かう云った。

「兄さん。少しおやすみなさい。こんなしづかな夕方ぢやありま

せんか。」

兄は構はず又どなる。

「地球を半分ふきとばしちまへ。石と石とを空でぶっつけ合せてぐらぐらする紫のいなびかりを起せ。まっくろな灰の雲からかみなりを鳴らせ。えい、意気地なしども。降らせろ、降らせろ、きらきらの熔岩で海をうづめろ。海から騰のぼる泡あわで太陽を消せ、生き残りの象から虫けらのはてまで灰を吸はせろ、えい、畜生ども、何をぐづぐづしてるんだ。」

ラクシヤンの若い第四子ししが

微笑わらつて兄をなだめ出す。

「大兄さん、あんまり憤おこらないで下さいよ。イーハトブさんが向

ふの空で、又笑つてゐますよ。」

それからこんどは低くつぶやく。

「あんな銀の冠を僕もほしいなあ。」

ラクシヤンの狂暴な第一子も

少ししづまって弟を見る。

「まあいゝさ、お前もしつかり支度をして次の噴火にはあのイーハトブの位になれ。十二ヶ月の中の九ヶ月をあの冠で飾れるのだぞ。」

若いラクシヤン第四子は

兄のことは聞きながし

遠い東の

雲を被<sup>かぶ</sup>つた高原を

星のあかりに透し見て

なつかしさうに眩<sup>つぶ</sup>やいた。

「今夜はヒームカさんは見えないなあ。あのまっ黒な雲のやつは、ほんたうにいやなやつだなあ、今日で四日もヒームカさんや、ヒームカさんのおつかさんをマントの下にかくしてるんだ。僕一つ噴火をやつてあいつを吹き飛ばしてやらうかな。」

ラクシヤンの第三子が

少し笑つて弟に云ふ。

「大へん怒つてるね。どうかしたのかい。えゝ。あの東の雲のやつかい。あいつは今夜は雨をやつてるんだ。ヒームカさんも蛇<sup>じゃも</sup>

紋石んせきのきものがずぶぬれだらう。」

「兄さん。ヒームカさんはほんたうに美しいね。兄さん。この前ね、僕、こゝからかたくりの花を投げてあげたんだよ。ヒームカさんのおつかさんへは白いこぶしの花をあげたんだよ。そしたら西風がね、だまつて持つて行つて呉くれたよ。」

「さうかい。ハツハ。まあいゝよ。あの雲はあしたの朝はもう霽はれてるよ。ヒームカさんがまばゆい新らしい碧あをいきものを着てお日さまの出るころは、きつと一番さきにお前にあいさつするぜ。そいつはもうきつとなんだ。」

「だけど兄さん。僕、今度は、何の花をあげたらいいだらうね。もう僕のところには何の花もないんだよ。」

「うん、そいつはね、おれの所にね、桜草があるよ、それをお前にやろう。」

「ありがたう、兄さん。」

「やかましい、何をふざけたことを云ってるんだ。」

暴つ<sup>あら</sup>ぽいラクシヤンの第一子が

金粉の怒鳴り声を

夜の空高く吹きあげた。

「ヒームカってなんだ。ヒームカって。」

ヒームカって云ふのは、あの向ふの女の子の山だらう。よわむしめ。あんなものときあふのはよせと何べんもおれが云ったぢやないか。ぜんたいおれたちは火から生れたんだぞ青ざめた水の中



で生れたやつらとちがふんだぞ。」

ラクシヤンの第四しし子は

しよげて首を垂れたが

しづかな直ぢかの兄が

弟のために長兄をなだめた。

「兄さん。ヒームカさんは血統はいゝのですよ。火から生れたのですよ。立派なカンランガンですよ。」

ラクシヤンの第一子は

尚なほさら更怒さらつて

立派な金粉のどなりを

まるで火のやうにあげた。

「知ってるよ。ヒームカはカンランガンさ。火から生れたさ。それはいゝよ。けれどもそんなら、一体いつ、おれたちのやうにめざましい噴火をやったんだ。あいつは地面まで騰のぼつて来る途中で、もう疲れてやめてしまったんだ。今こそ地殻ののろのろのぼりや風や空気のおかげで、おれたちと肩をならべてゐるが、元来おれたちとはまるで生れ付きがちがふんだ。きさまたちには、まだおれたちの仕事がよくわからないのだ。おれたちの仕事はな、地殻の底の底で、とけてとけて、まるでへたへたになつた岩がんしやう漿じやうや、上から押しつけられて古綿のやうにちぢまつた蒸気やらを取つて来て、いざといふ瞬間には大きな黒い山の塊を、まるで粉々に引き裂いて飛び出す。

煙と火とを固めて空に抛なげつける。石と石とをぶっつけ合せていなづまを起す。百万の雷を集めて、地面をぐらぐら云はせてやる。丁度、櫓ならノ木大学士といふものが、おれのどなりをひよつと聞いて、びっくりして頭をふらふら、ゆすぶったやうにだ。ハツハツハ。

山も海もみんな濃い灰に埋うづまってしまう。平らな運動場のやうになつてしまふ。その熱い灰の上でばかり、おれたちの魂は舞踏していゝ。いゝか。もうみんな大きわぎだ。さて、その煙が納まつて空気が奇麗に澄んだときは、こっちはどうだ、いつかまるで空へ届くくらゐ高くなつて、まるでそんなこともあつたかといふやうな顔をして、銀か白金かの冠ぐらゐをかぶつて、きちんとすま

してゐるのだぞ。」

ラクシヤンの第三子は

しばらく考へて云ふ。

「兄さん、私はどうも、そんなことはきらひです。私はそんな、まはりを熱い灰でうづめて、自分だけ一人高くなるやうなそんなことはしたくありません。水や空気がいつでも地面を平らにしよ  
うとしてゐるでせう。そして自分でもいつでも低い方低い方と流  
れて行くでせう、私はあなたのやり方よりは、却かへつてあの方がほ  
んたうだと思ひます。」

暴あつぽいラクシヤン第一子が

このときまるできらきら笑つた。

きらきら光って笑つたのだ。

(こんな不思議な笑ひやうを

いままでおれは見たことがない、

おどろ

愕くべきだ、立派なもんだ。)

櫛ノ木学士が考へた。

暴つぽいラクシヤンの第一子が

ずるぶんしばらく光つてから

やつとしづまって斯<sup>か</sup>う云つた。

「水と空気かい。あいつらは朝から晩まで、俺<sup>おい</sup>らの耳のそば<sup>まで</sup>

て、世界の平和の為に、お前らの傲<sup>がうまん</sup>慢を削るとかなんとか云ひ

ながら、毎日こそこそ、俺<sup>こす</sup>らを擦<sup>こす</sup>つて耗<sup>へら</sup>して行くが、まるつきり

うそさ。何でもおれのきくところに依よると、あいつらは海岸のふくふくした黒土や、美しい緑いろの野原に行つて知らん顔をして溝みぞを掘るやら、濠ほりをこさへるやら、それはどうも実にひどいもんださうだ。話にも何にもならんといふこつた。」

ラクシヤンの第三子も

つい大声で笑つてしまふ。

「兄さん。なんだか、そんな、こじつけみたいな、あてこすりみたいな、芝居のせりふのやうなもの、一向あなたに似合ひませんよ。」

ところがラクシヤン第一子は

案外に怒り出しもしなかつた。

きらきら光って大声で

笑って笑って笑ってしまつた。

その笑ひ声の洪水は

空を流れて遙かに遙かに南へ行つて

ねぼけた雷のやうにとゞろいた。

「うん、さうだ、もうあまり、おれたちのがらにもない小理窟こりくつは

止よさう。おれたちのお父さんにすまない。お父さんは九つの氷河

を持っていらしやつたさうだ。そのころは、こゝらは、一面の雪

と氷で白熊しろくまや雪ゆきぎつね狐つねや、いろいろなけものが居たさうだ。お

父さんはおれが生れるときなくなつたのだ。」

俄にはかにラクシヤンの末子まっしが叫ぶ。

「火が燃えてゐる。火が燃えてゐる。大兄さん。大兄さん。ごらんなさい。だんだんひろ拡がります。」

ラクシヤン第一子がびつくりして叫ぶ。

「熔ようがん岩、用意つ。灰をふらせろ、えい、畜生、何だ、野火か。」

その声にラクシヤンの第二子が

びつくりして眼をさまし、

その長い顎あごをあげて、

眼を釘くぎづけにされたやうに

しばらく野火をみつめてゐる。

「誰たれかやったのか。誰だ、誰だ、今ごろ。なんだ野火か。地面のほこり埃をさらさらさらつと掃除する、てまへなんぞに用はない。」



するとラクシヤンの第一子が  
ちよつと意地悪さうにわらひ

手をばたばたと振つて見せて

「石だ、火だ。熔岩だ。用意つ。ふん。」

と叫ぶ。

ばかなラクシヤンの第二子が

すぐ釣り込まれてあわて出し

顔いろをぼつとほてらせながら

「おい兄貴、一吠ほえしようか。」

と斯かう云つた。

兄貴はわらふ、

「一吠えつてもう何十万年を、きさまはぐうぐう寝てゐたのだ。

それでもいくらかまだ力が残つてゐるのか」

無精な弟は只一言<sup>たむとこと</sup>

「ない」

と答へた。

そして又長い顎<sup>あご</sup>をうでに載せ、

ぽっかりぽっかり寝てしまふ。

しづかなラクシャン第三子が

ラクシャンの第四子<sup>しし</sup>に云ふ

「空が大へん軽くなつたね、あしたの朝はきつと晴れるよ。」

「え、今夜は鷹<sup>たか</sup>が出ませんね」

兄は笑って弟を試す。

「さっきの野火で鷹の子供が焼けたのかな。」

弟は賢く答へた。

「鷹の子供は、もう余程、毛も剛こはくなりました。それに仲々強いから、きつと焼けないで遁にげたでせう」

兄は心持よく笑ふ。

「そんなら結構だ、さあもう兄さんたちはよくおやすみだ。櫛ならノ木な学士と云ふやつもよく睡ねむつてゐる。さつきから僕等の夢を見てゐるんだぜ。」

するとラクシヤン第四子が

ずるさうに一寸ちよつと笑つてかう云つた。

「そんなら僕一つおどかしてやらう。」

兄のラクシヤン第三子が

「よせよせいたづらするなよ」

と止めたが

いたづらの弟はそれを聞かずに

光る大きな長い舌を出して

大学士の額をべろりと嘗なめた。

大学士はひどくびびくりして

それでも笑ひながら眼をさまし

寒さにがたつと顫ふるへたのだ。

いつか空がすっかり晴れて

まるで一面星が瞬き  
まっ黒な四つの岩頸がんけいが  
たゞしくもとの形になり  
じつとならんで立つてゐた。

### 野宿第二夜

わが親愛な櫛ならノ木大学士は  
例の長い外ぐわいたう套すわいを着て  
夕陽ゆふひをせ中に一杯浴びて  
すっかりくたびれたらしく

度々空気に嘸かみつくやうな

大きな欠伸あくびをやりながら

平らな熊出街道くまでを

すたすた歩いて行つたのだ。

俄にはかに道の右側に

がらんとした大きな石切場が

口をあいてひらけて来た。

学士は咽喉のどをこくつと鳴らし

中に入って行きながら

三角の石かけを一つ拾ひ

「ふん、こゝも角閃花崗岩かくせんくわかうがん」と

つぶやきながらつくづくと

あたりを見れば石切場、

石切りたちも帰ったらしく

小さな<sup>ささ</sup>笹の小屋が一つ

淋<sup>さび</sup>しく隅<sup>すみ</sup>にあるだけだ。

「こいつはうまい。丁度いゝ。どうもひとのうちの門<sup>かどぐち</sup>口に立つ

て、もしもし今晚は、私は旅の者ですが、日が暮れてひどく困つてゐます。今夜一晩泊めて下さい。たべ物は持つてゐますから支度はなんにも要りませんなんて、へつ、こんなこと云ふのは、もう考へてもいやになる。そこで今夜はこゝへ泊らう。」

大学士は大きな近眼鏡を

ちよつと直してにやにや笑ひ

小屋へ入つて行つたのだ。

土間には四つの石かけが

炉の役目をしその横には

楯も<sup>ほだ</sup>いくらか積んである。

大学士はマツチをすつて

火をたき、それからビスケットを出し

もそもそ喰べたり手帳に何か書きつけたり

しばらくの間してゐたが

おしまひに火をどんだん燃して

ごろりと藁<sup>わら</sup>にねころんだ。



夜中になつて大学士は

「うう寒い」

と云ひながら

ばたりとはね起きて見たら

もうたきぐが燃え尽きて

たぐのおきだけになつてゐた。

学士はいそいでたきぐを入れる。

火は赤く愉快に燃え出し

大学士は胸をひろげて

つくづくとよく暖る。

それから一寸外へ出た。  
ちよつと

二十日の月は東にかゝり

空気は水より冷たかつた、

学士はしばらく足踏みをし

それからたばこを一本くはへマツチをすつて

「ふん、実にしづかだ、夜あけまでまだ三時間半あるな。」

つぶやきながら小屋に入った。

ぼんやりたき火をながめながら

わらの上に横になり

手を頭の上で組み

うとうとうとうとした。

突然頭の下あたりで

小さな声で云ひ合つてるのが聞えた。

「そんなに肱ひぢを張らないでお呉れ。おれの横の腹に病気が起るぢやないか。」

「おや、変なことを云ふね、一体いつ僕が肱を張つたね」

「そんなに張つてゐるぢやないか、ほんたうにお前この頃湿気を吸つたせいかわどくのさばり出して来たね」

「おやそれは私のことだらうか。お前のことぢやなからうかね、お前もこの頃は頭でみりみり私を押しつけようとすよ。」

大学士は眼を大きく開き

起き上つてその辺を見まはしたが

誰たれも居をらない様だつた。

声はだんだん高くなる。

「何がひどいんだよ。お前こそこの頃はすこしばかり風を呑んだ  
せいか、まるで人が変わったやうに意地悪になったね。」

「はてね、少しぐらゐ僕が手足をのぼしたってそれをとやかうお  
前が云ふのかい。十万二千年昔のことを考へてごらん。」

「十万何千年前とかがどうしたの。もつと前のことさ、十万百万  
千万年、千五百の万年の前のあの時をお前は忘れてしまつてゐる  
のかい。まさか忘れはしないだらうがね。忘れなかつたら今にな  
つて、僕の横腹を肱で押すなんて出来た義理かい。」

大学士はこの語ことばを聞いて  
すつかり愕おどろいてしまふ。

「どうも実に記憶のいゝやつらだ。えゝ、千五百の万年の前のその時をお前は忘れてしまつてゐるのかい。まさか忘れはしないだらうがね、えゝ。これはどうも実に恐れ入つたね、いつたい誰だ。変に頭のいゝやつは。」

大学士は又そろそろと起きあがり

あたりをさがすが何も無い。

声はいよいよ高くなる。

「それはたしかに、あなたは僕の先輩さ。けれどもそれがどうしたの。」

「どうしたのぢやないぢやないか。僕がやつと体たい骸かくと人格を完成してほつと息をついてるとお前がすぐ僕の足もとでどんな声を

したと思ふね。こんな工合ぐあひさ。もし、ホンブレンさま、こゝの所で私もちつとばかり延びたいと思ひます。どうかあなたさまのおみあしききにでも一寸ちよつと取りつかせて下さいませ。まあかう云ふお前のことばだったよ。」

櫛ならノ木学士は手たを叩たたく。

「ははあ、わかつた。ホンブレンさまと、一人はホルンブレンだ。すると相手は誰たれだらう。わからんなあ。けれども、ふふん、こいつは面白い。いよいよ今日も問答がはじまつた。しめ、しめ、これだから野宿はやめられん。」

大学士は煙草たばこを新らしく一本出してマツチをする

声はいよいよ高くなる。

もつともいくら高くても

せいぜい蚊の軍歌ぐらゐだ。

「それはたしかにその通りさ、けれどもそれに対してお前は何と答へたね。いゝえ、そいつは困ります、どうかほかのお方とご相談下さいと斯こんなに立派にはねつけたらう。」

「おや、とにかくさ。それでもお前のかまはず僕の足さきにとりついたんだよ。まあ、そんなこと出来たもんだらうかね。もつとも誰かさんは出来たやうさ。」

「あてこするない。とりついたらんぢやないよ。お前の足が僕の体骨の頭のところにあったんだよ。僕はお前よりもつと前に生れた

ジツコさんを頼んだんだよ。今だって僕はジツコさんは大事に大事にしてあげてるんだ。」

大学士はよろこんで笑ひ出す。

「はっはっは、ジツコさんといふのは磁鉄鉱だね、もうわかつたさ、喧嘩けんくわの相手はバイオタイトだ。して見るとなんでもこの辺にさつきの花崗岩くわかうがんのかけらがあるね、そいつの中の鉱物がかやかや物を云ってるんだね。」

なるほど大学士の頭の下に  
支那しなの六錢銀貨のくらゐの

みかげのかけらが落ちてゐた。

学士はいよいよにこにこする。



「さうかい。そんならいゝよ。お前のやうな恩知らずは早く粘土になつちまへ。」

「おや、呪<sup>のろ</sup>ひをかけたね。僕も引つ込んぢやゐないよ。さあ、お前のやうな、」

「一寸<sup>ちよつと</sup>お待ちなさい。あなた方は一体何をさつきから喧<sup>けん</sup>嘩<sup>くわ</sup>してるんですか。」

新らしい二人の声が

一緒にはつきり聞え出す。

「オーソクレさん。かまはないで下さい。あんまりこいつがわからないもんですからね。」

「双子さん。どうかかまはないで下さい。あんまりこいつが恩知

らずなもんですからね。」

「ははあ、双晶のオーソクレーヌが仲裁に入った。これは実におもしろい。」

大学士はたきびに手をあぶり

顔中口にしてよろこんで云ふ。

二つの声が又聞える。

「まあ、静かになさい。僕たちは実に実に長い間堅く堅く結び合  
つてあのまつくらなまつくらなとこで一緒にまはりからのほげし  
い圧迫やすてきな強い熱にこらへて来たではありませんか。一時  
はあまりの熱と力にみんな一緒に気違ひにでもなりさうなのをじ  
つとこらへて来たではありませんか。」

「さうです、それは全くその通りです。けれども苦しい間は人々のたのんで楽になると人をそねむのはぜんたいいゝ事なんでせうか。」

「何だつて。」

「ちよつと、ちよつと、ちよつとお待ちなさい。ね。そして今やつとお日さまを見たでせう。そのお日さまも僕たちが前に土の底でコングロメレートから聞いたとは大へんなちがひではありませんか。」

「えゝ、それはもうちがつてます。コングロメレートのはなしではお日さまはまっかで空は茶いろなもんだと云つてゐましたが今見るとお日さまはまっ白で空はまっ青です。あの人はうそつきで

したね。」

双子の声が又聞えた。

「さあ、しかしあのコングロメレートといふ方は前にたゞの砂利だったところはほんたうに空が茶いろだったかも知れませんか。」

「さうでせうか。とにかくうそをつくこととひとの恩を仇あだでかへすのとはどつちも悪いことですね。」

「何だと、僕のことを云つてるのかい。よしさあ、僕も覚悟があるぞ。決闘をしろ、決闘を。」

「まあ、お待ちなさい。ね、あのお日さまを見たときのうれしかったこと。どんなに僕らは叫んだでせう。千五百万年光といふものを知らなかったんだもの。あの時鋼の槌つちがギギンギギンと僕ら

の頭にひゞいて来ましたね。遠くの方で誰かが、あゝお前たちも  
たうとうお日さまの下へ出るよと叫んでゐた、もう僕たちの誰と  
誰とが一緒になつて誰と誰とがわかれなければならぬか。一向  
判らなかつたんですね。さよならさよならつてみんな叫びました  
ねえ。そしたら急にパツと明るくなつて僕たちは空へ飛びあがり  
ましたねえ。あの時僕はお日さまの外に何か赤い光るものを見た  
やうに思ふんですよ。」

「それは僕も見たいよ。」

「僕も見たいんだよ、何だつたらうね、あれは。」  
大学士は又笑ふ。

「それはね、明らかにたがねのさきから出た火花だよ。パチツて

云つたらう。そして熱かつたらう。」

ところが学士の声などは

鉱物どもに聞えない。

「そんなら僕たちはこれからさきどうなるでせう。」

双子の声が又聞えた。

「さあ、あんまりこれから愉快なことでもないやうですよ。僕が前にコングロメレートから聞きましたけどどうも僕らはこのまゝ又土の中にうづもれるかさうでなければ砂か粘土かにわかれてしまふだけなやうですよ。この小屋の中に居たって安心にもなりません。内に居たって外に居たってたかが二千年もたつて見れば結局おんなじこととせう。」

大学士はすっかりおどろいてしまふ。

「実にどうも達観してるね。この小屋の中に居たって外に居たってたかが二千年も経たって見れば粘土か砂のつぶになる、実にも達観してる。」

その時には俄かにピチピチ鳴り

それからバイオタが泣き出した。

「あゝ、いた、いた、いた、いた、痛あい、いたい。」

「バイオタさん。どうしたの、どうしたの。」

「早くプラチヨさんをよばないとだめだ。」

「ははあ、プラチヨさんといふのはプラチオクレースで青白いから医者なんだな。」

大学士はつぶやいて耳をすます。

「プラチヨさん、プラチヨさん。プラチヨさん。」

「はあい。」

「バイオタさんがひどくおなかが痛がってます。どうか早く診みて下さい。」

「はあい、なあにべつだん心配はありません。かぜを引いたのでせう。」

「ははあ、こいつらは風を引くと腹が痛くなる。それがつまり風化だな。」

大学士は眼鏡めがねをははづし  
 はんけちはんけちで拭ふいて眩つぶやく。



「プラチヨさん。お早くどうか願ひます。只ただいま今氣絶をいたしました。」

「はあい。いまだんだんそつちを向きますから。ようつと。はい、はい。これは、なるほど。ふふん。ちよつと一寸脈をお見せ、はい。こんどはお舌、ははあ、よろしい。そして第十八へきかい予備面が痛い。なるほど、ふんふん、いやわかりました。どうもこの病氣は恐こはいですよ。それにお前さんのからだは大地の底に居たときから慢性りよくでい病にかかつて大分軟化してますからね、どうも恢くわい復ふくの見込がありません。」

病人はキシキシと泣く。

「お医者さん。私の病氣は何でせう。いつごろ私は死にませう。」

「さやう、病人が病名を知らなくてもいゝのですがまあ蛭ひるいし石病の初期ですね、所謂いはゆるふう病の中の一つ。俗にかぜは万病のもとと云ひますがね。それから、えゝと、も一つのご質問はあなたの命でしたかね。さやう、まあ長くても一万年は持ちません。お気の毒ですが一万年は持ちません。」

「あゝあ、さっきのホンブレンのやつのろの呪のろひが利いたんだ。」

「いや、いや。そんなことはない。けだし、風病にかかつて土になることはけだしすべて吾人ごじんに免まかれないことですから。けだし。」

「あゝ、プラチヨさん。どんな手あてをいたしたらよろしうございませうか。」

「さあ、さう云ふぐあひ工合に泣いてゐるのは一番よろしくありません。からだをねぢつてあちこちのへきかいよび面にすきまをつくるのはなほさら、よろしくありません。その他風にあたれば病氣のしやうけつを来します。日にあたれば病勢がつのります。霜にあたれば病勢が進みます。露にあたれば病状がかう進みます。雪にあたれば症状が悪変します。じつとしてゐるのはなほさらよろしくありません。それよりは、その、精神的に眼をつむつて観念するのがいゝでせう、わがこの恐れるところの死なるものは、そもそも何であるか、その本質はいかん、生死巖頭がんとうに立つて、をかしいぞ、はてな、をかしい、はて、これはいかん、あいた、いた、いた、いた、いた、いた、」

「プラチヨさん、プラチヨさん、しつかりなさい。一体どうなすつたのです。」

「うむ、私も、うむ、風病のうち、うむ、うむ。」

「苦しいでせう、これはほんたうにお気の毒なことになりました。」

「うむ、うむ、いゝえ、苦しくありません。うむ。」

「何かお手あていたしませう。」

「うむ、うむ、実はわたくしも地面の底から、うむ、うむ、大分カオリン病にかかつてゐた、うむ、オーソクレさん、オーソクレさん。うむ、今こそあなたにも明します。あなたも丁度わたし同様の病気です。うむ。」

「あゝ、やっぱりさやうでございましたか。全く、全く、全く、  
実に、実に、あいた、いた、いた、いた、いた。」

そこでホンブレンドの声がした。

「ずるぶん神経過敏な人だ。すると病気でないものは僕とクオー  
ツさんだけだ。」

「うむ、うむ、そのホンブレンもバイオタと同病。」

「あ、いた、いた、いた。」

「おや、おや、どなたもずるぶん弱い。健康なのは僕一人。」

「うむ、うむ、そのクオーツさんもお気の毒ですがクウシヤウ中  
の瓦斯<sup>ガス</sup>が病因です。うむ。」

「あいた、いた、いた、いた、いた。」

「ずるぶんひどい医者だ。漢方の藪<sup>やぶ</sup>医<sup>い</sup>だな。たうとうみんな風化かな。」

大学士は又新らしく

たばこをくはへてにやにやする。

耳の下では鉋物どもが

声をそろへて叫んでゐた。

「あ、いた、いた、いた、いた、た、たた。」

みんなの声はだんだん低く

たうとうしんとしてしまふ。

「はてな、みんな死んだのか。あるいは僕だけ聞えなくなったのか。」

大学士はみかげのかげら

手にとりあげてつくづく見て

パチツと向ふの隅へ弾く。

それから櫓ほだを一本くべた。

その時はもうあけ方で

大学士は背はいなう囊から

巻煙草まきたばこを二包み出して

櫓のお礼に藁わらに置き

背囊をしよひ小屋を出た。

石切場の壁はすっかり白く

その西側の面だけに

月のあかりがうつつてゐた。

### 野宿第三夜

(どうも少し引き受けやうが軽率だったな。グリーンランドの成金がびつくりする程立派な蛋白質たんぱくせきなどを、二週間でさがしてやらうなんてのは、實際少し軽率だった。

どうも斯かう人の居ない海岸などへ来て、つくづく夕方歩いてみると東京のまちのまん中で鼻の赤い連中などを相手にして、いゝ加減ほらの法螺ほらを吹いたことが全く情けなくなつちまふ。どうだ、この頁けつ岩がんの陰気なこと。全くいやになつちまふな。おまけに海も



暗くなつたし、なかなか、りうもんはり流紋玻璃にも出でつ会くはさない。それに今夜もやっぱり野宿だ。野宿も二晩ぐらゐはいゝが、三晩となつちやうんざりするな。けれども、まあ、仕方もないさ。ビスケットのあるうちは、歩いて野宿して、面白い夢でも見る分が得といふもんだ。)

例のなら櫛ノ木大学士が

ポケット衣囊トに両手を突つ込んで

少しせ中を高くして

つくづく考へ込みながら

もう夕方のねずみ鼠いろの

頁岩の波に洗はれる

海岸を大股おほまたに歩いてゐた。

全く海は暗くなり

そのほのじろい波がしらだけ

一列、何かけもののやうに見えたのだ。

いよいよ今日は歩いても

だめだと学士はあきらめて

ぴたつと岩に立ちどまり

しばらく黒い海面と

向ふに浮ぶ腐った馬鈴薯いものやうな雲を

眺ながめてゐたが、又ポケットから

煙草たばこを出して火をつけた。

それからくるつと振り向いて

陸の方をじつと見定めて

急いでそつちへ歩いて行つた。

そこには低い崖がけがあり

崖がけの脚には多分は濤なみで

削られたらしい小さな洞ほらがあつたのだ。

大学士はにこにこして

中へはひつて背はいなう囊ふしをとる。

それからまつくらなところで

もしやもしやビスケットを喰べた。

ずうつと向ふで一列濤が鳴るばかり。

「ははあ、どうだ、いよいよ宿がきまつて腹もできると野宿もそんなに悪くない。さあ、もう一服やつて寝よう。あしたはきつとうまく行く。その夢を今夜見るのも悪くない。」

大学士の吸ふ巻煙草が

まきたばこ

ポツンと赤く見えるだけ、

「斯<sup>か</sup>う納まつて見ると、我輩もさながら、洞熊<sup>ほらくま</sup>か、洞窟<sup>どうくつ</sup>住人

だ。ところでもう寝よう。

やみ  
闇の向ふで

濤がぼとぼと鳴るばかり

鳥も啼<sup>な</sup>かなきや

洞をのぞきに人も来ず、と。ふん、斯<sup>こ</sup>んなあんばいか。寝ろ、

寝ろ。」

大学士はすぐとろとろする

疲れて睡ねむれば夢も見ない

いつかすつかり夜が明けて

昨夜の続きの頁けつが岩が

青白くぼんやり光つてゐた。

大学士はまるでびっくりして

急いで洞を飛び出した。

あわてて帽子を落しさうになり

それを押へさへもした。

「すつかり寝過ごしちゃった。ところでおれは一体何のために歩

いてゐるんだつたかな。えゝと、よく思ひ出せないぞ。たしかに昨日も一昨日も人の居ない処ところをせつせと歩いてゐたんだが。いや、もつと前から歩いてゐたぞ。もう一年も歩いてゐるぞ。その目的はと、はてな、忘れたぞ。こいつはいけない。目的がなくて学者が旅行をするといふことはない、必ず目的があるのだ。化石ぢやなかつたかな。えゝと、どうか第三紀の人類に就ついてお調べを願ひます、と、誰たれか云つたやうだ。いゝや、さうぢやない、白堊紀はくわの巨おほきな爬はちゆう虫類の骨こつかく骼を博物館の方から頼まれてゐるんですがいかにございませう、一つお探しを願はれますまいかと、斯うぢやなかつたかな。斯うだ、斯うだ、ちがひない。さあ、ところでこゝは白堊系はくわの頁岩けつがんだ。もうこゝでおれは探し出すつもり

だったんだ。なるほど、はじめにはつきりしたぞ。さあ探せ、恐  
竜の骨こっかく骼だ。恐竜の骨こっかく骼だ。」

学士の影は

黒く頁岩の上に落ち

おほまた 大股おほまたに歩いてゐたから

踊つてゐるやうに見えた。

海はもの凄すごいほど青く

空はそれより又青く

幾きれかのちぎれた雲が

まばゆくそこに浮いてゐた。

「おや出たぞ。」

櫛ならノ木大学士が叫び出した。

その灰いろの頁岩の

平らな奇麗な層面に

直径が一米メートルばかりある

五本指の足あとが

深く喰ひ込んでならんでゐる。

所々上の岩のために

かくれてゐるが足裏の

皺しわまではつきりわかるのだ。

「さあ、見附けたぞ。この足跡の尽きた所には、きつとこいつが倒れたまゝ化石してゐる。巨おほきな骨だぞ。まづ背骨なら二十米は



あるだらう。巨きなもんだぞ。」

大学士はまるで雀躍こをどりして

その足あとをつけて行く。

足跡はずるぶん続き

どこまで行くかわからない。

それに太陽の光線は赭あかく

たいへん足が疲れたのだ。

どうもをかしいと思ひながら

ふと気がついて立ちどまったら

なんだか足が柔らかな

泥に吸はれてゐるやうだ。

堅い頁岩けつがんの筈はずだつたと思つて

櫛ならノ木大学士はうしろを向いた。

そしたら全く愕おどろいた。

さつきから一心に跡つけて来た

巨おほきな、墓がまの形の足あとは

なるほどずうつと大学士の

足もとまでつゞいてゐて

それから先ももつと続くらしかったが

も一つ、どうだ、大学士の

銀座でこさへた長靴ながぐつの

あともぞろつとついてゐた。

「こいつはひどい。我輩の足跡までこんなに深く入るといふのは実際少し恐れ入った。けれどもそれでも探求の目的を達することは達するな。少し歩きにくいだけだ。さあもう斯<sup>か</sup>うなったらどこまでだって追って行くぞ。」

学士はいよいよ大<sup>おほまた</sup>股に

その足跡をつけて行つた。

どかどか鳴るものは心臓

ふいごのやうなものは呼吸、

そんなに一生けん命だったが

又そんなにあたりもしづかだった。

大学士はふと波打ぎはを見た。

濤なみがすっかりしづまってるた。

たしかにさつきまで

寄せて吠ほえて碎けてゐた濤が

いつかすっかりしづまってるた。

「こいつは変だ。おまけにずるぶん暑いぢやないか。」

大学士はあふむいて空を見る。

太陽はまるで熟した苹果りんごのやうで

そこらも無暗むやみに赤かった。

「ずるぶんいやな天気になった。それにしてもこの太陽はあんまり赤い。きつとどこかの火山が爆発をやった。その細かな火山灰が正しく上層の気流に混じて地球を包围してゐるな。けれどもそ

れだからと云つて我輩のこの追跡には害にならない。もうこの足あとの終るところにあの途方もない爬はちゆう虫の骨がころがつてるんだ。

我輩はその地点を記録する。もう一足だぞ。」  
大学士はいよいよ勢いきほひこんで

その足跡をつけて行く。

ところが間もなく泥浜は

みさき岬のやうに突き出した。

「さあ、こゝを一つ曲つて見ろ。すぐ向ふ側にその骨がある。けれども事によつたらすぐ無いかも知れない。すぐなかつたら少し追つて行けばいゝ。それだけのことだ。」

大学士はにこにこ笑ひ

立ちどまつて巻煙草まきたばこを出し

マッチを擦すつて煙を吐く。

それからわざと顔をしかめ

ごくおうやうに大股おほまたに

岬をまはつて行つたのだ。

ところがどうだ名高い櫓ならノ木大学士が

釘付けくぎづにされたやうに立ちどまつた。

その眼は空しく大きく開き

その膝ひざは堅くなつてやがてふるへ出し

煙草もいつか泥に落ちた。

青ぞらの下、向ふの泥の浜の上に

その足跡の持ち主の

途方もない途方もない 雷らいりゆう 竜りゆう 氏が

いやに細長い頸くびをのぼし

汀なぎさの水を呑のんでゐる。

長さ十間、ざらざらの

鼠ねずみいろの皮の雷竜が

短い太い足をちぢめ

厭いやらしい長い頸をのたのたさせ

小さな赤い眼を光らせ

チユウチユウ水を呑んでゐる。

あまりのことに櫛ノ木大学士は

頭がしいんとなつてしまった。

「一体これはどうしたのだ。中生代に来てしまったのか。中生代がこつちの方へやって来たのか。ああ、どっちでもおんなじことだ。とにかくあすこに雷らいりゆう竜が居て、こつちさへ見ればかけて来る。大学士も魚も同じことだ。見るなよ、見るなよ。僕はいま、ごくこつそりと戻るから。どうかしばらく、こつちを向いちやいけないよ。」

いまや櫛ならノ木大学士は

そろりそろりと後あとずさ退りして

来た方へ遁にげて戻る。

その眼はじつと雷竜を見



その手はそつと空気を押す。

そして雷竜の太い尾が

まづ見えなくなりその次に

山のやうな胴がかくれ

おしまひ黒い舌を出して

びちよびちよ水を呑のんでゐる

蛇へびに似たその頭がかくれると

大学士はまづ助かつたと

いきなり来た方へ向いた。

その足跡さへずんずんたどつて

遁げてさへ行くならもう直きに

なぎさなみ  
汀に濤も打って来るし

空も赤くはなくなるし

足あとももう泥に食ひ込まない

堅い頁けつがん岩の上に行く。

崖がけにはゆふべの洞ほらもある

そこまで行けばもう大丈夫

こんなあぶない探険などは

今度かぎりはやめてしまひ

博物館へも断はらせて

東京のまちのまん中で

赤い鼻の連中などを

相手に法螺ほらを吹いてればいゝ。

大体こんな計算だった。

それもまるきり電いなづまのやうな計算だ。

ところが櫛ならノ木大学士は

も一度ぎくつと立ちどまつた。

その膝ひざはもうがたがたと鳴り出した。

見たまへ、学士の来た方の

泥の岸はまるでいちめん

うじやうじやの雷らいりゆう 竜りゆう どもなのだ。

まっ黒なほど居つたのだ。

長い頸くびを天に延ばすやつ

頸をゆつくり上下に振るやつ

急いで水にかけ込むやつ

実にまるでうじやうじやだった。

「もういけない。すっかりうまくやられちゃった。いよいよおれも食はれるだけだ。大学士の号も一所になくなる。雷竜はあんまりひどい。前にも居るしうしろにも居る。まあたゞ一つたよりになるのはこの岬みさきの上だけだ。そこに登っておれは助かるか助からないか、事によったら新生代の沖積世が急いで助けに来るかも知れない。さあ、もうたつたこの岬みさきだけだぞ。」

学士はそつと岬みさきにのぼる。

まるで蕈きのことあすなるとの

合の子みたいな変な木が

崖がけにもじやもじや生えてゐた。

そして本当に幸なことは

そこには雷竜が居なかつた。

けれども折角登つても

そこらの景色は

あんまりいゝといふでもない、

岬の右も左の方も

泥なぎせの渚は、もう一めんの雷竜だらけ

実にもじやもじやしてゐたのだ。

水の中でも黒い白鳥のやうに

頭をもたげて泳いだり

頸をくるつとまはしたり

その厭いやらしいこと恐こはいこと

大学士はもう眼をつぶった。

ところがいつか大学士は

自分の鼻さきがふつつ鳴つて

暖いのに気がついた。

「たうとう来たぞ、喰はれるぞ。」

大学士は観念をして眼をあいた。

大き二尺の四つ角な

まつ黒な雷らいりゆう竜の顔が

すぐ眼の前までにゆうと突き出され

その眼は赤く熟したやう。

その頸は途方もない向ふの

鼠ねずみいろのがさがさした胴まで

まるで管のやうに続いてゐた。

大学生はカーンと鳴った。

もう喰はれたのだ、いやさめたのだ。

眼がさめたのだ、洞ほらあな穴は

まだまつ暗で恐らくは

十二時にもならないらしかった。

そこで櫓ならノ木大学生は

一つ小さなせきばらひをし

まだ雷電が居るやうなので

つくづく闇やみをすかして見る。

外ではたしかに濤なみの音

「なあんだ。馬鹿ばかにしてやがる。もう睡ねむれんぞ。寒いなあ。」

又たばこを出す。火をつける。

櫛ノ木大学士は宝石学の専門だ。

その大学士の小さな家

「貝けいの火いてい兄弟商会」の

赤鼻の支配人がやって来た。



「先生お手紙でしたから早速とんで来ました。大へんお早くお帰りでした。ごく上等のやつをお見あたりでございましたか、何せ相手がグリーンランドの途方もない成金ですからありふれたものぢやなかなか承知しないんです。」

大学士は葉巻を横にくはへ

雲母紙うんもしを張った天井を

斜めに見ながらかう云った。

「うん探して来たよ、僕は一ぺん山へ出かけるともうどんなもんでも見附からんと云ふことは断じてない、けだしすべての宝石はみな僕をしたつてあつまつて来るんだね。いやそれだから、此度こんどなんかもまつたくひどく困ったよ。殊に君注文が割合に柔らかな

たんぱくせき  
蛋白石だらう。僕がその山へ入ったら蛋白石どもがみんなざら

ざら飛びついて来てもうどうしてもはなれないぢやないか。それ

が君みんな貴<sup>プレシアスオーパール</sup>蛋白石の火の燃えるやうなやつなんだ。望みの

とほりみんな背<sup>はいなう</sup>囊の中に納めてやりたいことはもちろんだった

が、それでは僕も身動きもできなくなるのだから気の毒だったが

その中からごくいゝやつだけ撰んださ。」

「ははあ、そいつはどうも、大へん結構でございました。しかし、

そのお持ち帰りになりました分はいづれでございませうか。一寸<sup>ちよつと</sup>

拝見をねがひたう存じます。」

「あゝ、見せるよ。たゞ僕はあんな立派なやつだから、事によつたらもうすっかり曇ったぢやないかと思ふんだ。實際蛋白石ぐら

るたよりのない宝石はないからね。今日虹にじのやうに光つてゐる。あしたは白いたゞの石になつてしまふ。今日は円くて美しい。あしたは砕けてこなごなだ。そいつだね、こはいのは。しかしとにかく開いて見よう。この背囊さ。」

「なるほど。」

貝の火けいてい兄弟商会の

鼻の赤いその支配人は

こくつと息を呑のみながら

大学士の手もとを見つめてゐる。

大学士はごく無雑作に

背囊をあけて逆さにした。

下等な はりたんぼくせき 玻璃蛋白石 が

三十ばかりころげだす。

「先生、困るぢやありませんか。先生、これでは、何でも、あんまりぢやありませんか。」

な櫛ノ木大学士は怒り出した。

「何があんまりだ。僕の知ったこつちやない。ひどい難儀をしてあるんだ。旅費さへ返せばそれでよからう。さあ持つて行け。帰れ、帰れ。」

大学士は上着の衣囊かぶしから

ねずみ鼠しわいろの皺しわくちやになつた状袋を

出していきなり投げつけた。

「先生困ります。あんまりです。」

貝の火兄けいてい弟商会の

赤鼻の支配人は云ひながら

すばやく旅費の袋をさらひ

上着の內衣うちポケット囊ぶくろに投げ込んだ。

「帰れ、帰れ、もう来るな。」

「先生、困ります。あんまりです。」

たうとう貝の火兄弟商会の

赤鼻の支配人は帰って行き

大学士は葉巻を横にくはへ

雲母うんもし紙を張った天井を

斜めに見ながらにやつと笑ふ。

# 青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第十卷」筑摩書房

1979（昭和54）年9月15日初版第1刷発行

1983（昭和58）年4月20日初版第5刷発行

入力：林 幸雄

校正：今井忠夫

2003年4月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。



# 櫛ノ木大学士の野宿

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>